



エネルギー環境教育 情報交換会のご報告

開催日：2014年6月25日(水)

主催：特定非営利活動法人エコテクみらい研究所

株式会社プラスエム

エネルギー環境教育情報交換会概要

1. 実施日：2014年6月25日(水)
2. 会 場：ハロー貸会議室八丁堀
東京都中央区入船1-1-26 永井ビル2階
3. 参加者：23名 (小学校・中学校・高校・教育委員会関係者など)
4. プログラム
 - 18：30 開 会
 - 18：30～18：40 オリエンテーション・趣旨説明
 - 8：40～19：15 レクチャー
「最近のエネルギー情勢を踏まえた今後のエネルギー環境教育」
帝京大学教職大学院 教授 澁澤 文隆氏
 - 19：15～19：40 参加者紹介・意見交換
 - 19：40～19：50 休憩
 - 19：50～20：25 交流会
 - 20：25～20：30 閉会挨拶
 - 20：30 閉 会

発言要旨

【澁澤氏レクチャー】

- 福島第一原子力発電所事故を受けて、エネルギー問題が安全保障に関する重要課題として多くの人々に認識されるような関心事になってきた。しかし、その結果、学校教育においてエネルギー・環境教育に熱心に取り組むようになったかという、教科によって受け止め方は異なると思うが、私のように社会科に携わっている者からすると、むしろ遠ざかっているように見える。
- 今の社会は、情報発信や意思表示が非常に気楽にできるようになっている。例えば、原子力発電の今後のあり方については本来様々な観点からの考察が必要であるが、実際には非常に単純な構図で意思表示がなされているように感じる。その意思表示と違った方向の意見が出てくると、そこを集中的に潰していくという動きが大衆化した。議論がなく結果だけで判断しているような風潮がある。
- こうした状況を考えると、子どもだけでなく、大人を対象とした教育活動がもっと必要ではないか。勉強不足の状態意思表示することが、あまりに目立っている。特に原子力発電のような社会的なコンセンサスが得られていない課題を授業で扱う場合、どのような取り上げ方をしても保護者から様々な意見が出される。そうすると、先生方としては「触らない方がいい」という気持ちが働いてしまう。
- こうした状況の中でも、エネルギー問題そのものに関心をもたせることは重要で、そのためには、まずは「問題の所在」を明確に把握できる学習指導が必要だ。
- 現状では、エネルギー・環境教育は小・中・高校で分断されており、小学校の充実ぶりに比べ中学・高校（特に普通科）で大きな課題を抱えている。少なくとも、子どもたちの自我が芽生えて意思表示ができる段階における学習指導が手薄になっている。
 - 大人と子どもが一緒になって活動することが今後ますます重要であり、その意味で、E S D（持続可能な開発のための教育）との連携が大切だ。E S Dは本来、地域単位での実現を目指すことが基本的な方向性であり、地域という舞台の中で学校も役割を果たしていくことが求められる。



【澁澤氏レクチャーを受けての意見交換】

<大学・理科>

- 理科の立場からすると、今の状況はエネルギー・環境教育にとって追い風のように感じている。ただ、学習の中身としては節電や節水など何十年も変わらないような実践が多く、澁澤先生が指摘した「問題の所在」に関する学習については、特に小学校では十分ではなかった。
- 3年ぐらい前から「低炭素教育」を提唱している。これは、再生可能エネルギーの開発・導入など、低炭素社会を形成するために何をすべきかというテーマに絞った形の教育である。
- 子どもたちが学校で学んだことを家庭に持ち帰ることによる波及効果が、かなり期待できるではないか。

<教育委員会>

- 地域や家庭・保護者との関わりの中でのエネルギー・環境教育の事例として、川口市の「エコライフDAY」を紹介したい。これは、川口市・川口市民環境会議等が2000年から実施している事業で、家庭で取り組んだ二酸化炭素削減の取り組みを学校が取りまとめ、それを川口市がランク付けし表彰するものだ。

<高校・理科>

- 高校の理科に長年携わってきたが、原子力発電を含め高校生が科学的知識をどの程度修得できているのか不安がある。

<小学校・理科>

- 保護者が風評に左右されるケースが多い。例えば、放射線について客観的に学ぶための放射線教育は子どもの発達段階に応じて必要だと思うが、どうしても原子力発電の教育に結び付けてとらえられてしまう傾向がある。
- ○配布資料の「エネルギー環境教育ガイドライン」では、小学校段階の目標として「基礎的な知識・技能の習得」が示されているが、はたして現行のカリキュラムの中でこれらを子ども達が十分に身に着けることができるのだろうか。

<大学・社会>

- これまでの話や意見を聞いて、改めて教科による特性があることを感じたが、今欠けているのは、生活とのかかわりの中でエネルギー・環境を考えることではないか。
- エネルギー・環境教育をタブー化する傾向があるとの指摘だが、これは様々な「〇〇教育」に共通する問題である。どうしても当たり障りのない取り扱いとなり、結果として意味をなしていないケースも多い。今こそ「時代の要請に応える教育」が必要だ。



交流会における主な発言

<中学校・理科>

- これまで総合学習等の中でエネルギー・環境教育を実践してきたが、今の学校ではまだまだ十分ではないと考えている。次年度からは皆さんの力も借りながら取り組んでいきたい。
- 新しい学習指導要領の中でどうエネルギー・環境教育を入れていくのかを考えている。
- 理科の中で子ども達にエネルギーの質感を教える授業を行っている。
- 今回のIPCC報告書でも注目されたCCS（二酸化炭素の回収・貯留）について関心はあるが、あまり情報がないので授業でも取り上げ難い。こうした新技術について様々な情報が出てきたらよい。

<中学校・社会科>

- 以前にエネルギー・環境教育を通して知り合った先生方と再会することができ、また一緒に勉強する機会がもてればと感じた。

<中学校・技術科>

- 技術科でもエネルギーを扱うが、時数の関係もあって十分な教育ができていないのが現状だ。これからは合科的なアプローチがもっと必要ではないか。また、いろいろな方に刺激を受けながら、自分でしっかり勉強していくことの大切さを改めて感じた。

<高校・理科>

- 子どもたちがエネルギーをどのようにイメージしているのかに関する調査が必要ではないか。子どもたちの「エネルギー観」をしっかりと把握しておくことが大事だ。

<教育委員会>

- 子どもたちを通じて家庭・地域を巻き込むといった歯車がうまく回っていくことが望ましい。

<大学・社会>

- 多くの教育関係者は「子どもを介して大人が働きかけていけば社会は変わっていく」と考えているように見えるが、東日本大震災以降、子どもをいくら教育しても、大人たちの反応はそれを超えて独り歩きしていく。本当に「子どもを通して大人を変えることができるのか」考えるべきだ。
- 教科を超えた交流は可能性を秘めているように感じるが、現実的には「教科の壁」は結構厚いと思っている。教科を超えて交流するエネルギーは、教科の中で育てていく活動よりももっと必要で、本当にそれが効果的なのかどうか議論すべきだ。

アンケート結果（概要）

本情報交換会について出席者から寄せられた主な意見は以下のとおり。

① 本情報交換会に参加した理由

- 「エネルギー・環境教育をめぐる最新動向を知りたかった」がほとんどで、「実践に活かせるヒントや情報の入手」を期待しての参加も一部あった。

② 特に参考になったこと・印象に残ったこと

- どのようにすれば子どもの発達に応じたエネルギー・環境教育を実践できるようになるのか、その課題と取り組みの理念が見えてきた。
- 小・中・高校の校種によるエネルギー・環境教育の現状がわかった。
- 「議論がなく結論が出される状況」は学校教育においても大きな課題だと思う。課題意識をもって主体的に議論し、判断できる力を育成していきたい。
- 環境や放射線等に関する客観的なデータの提示があればよかった。

③ 今後情報交換会で取り上げてほしいテーマ

- 「E S D（持続可能な開発のための教育）」が最も多く、以下、「企業等による学校教育支援（教育C S R）」など。

④ 今後の情報交換会への参加

- 「日程が合う限り積極的に参加したい」と「テーマによっては参加したい」がほぼ半数。